

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

トバ・バタック族の親族呼称について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 集而 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004638

トバ・バタック族の親族呼称について

吉 田 集 而*

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 7) 女をあたえてくれる側の姻族の呼称 |
| 2. トバ・バタック族の親族呼称 | 8) 親族でないトバ族の人々をよぶときの呼称 |
| 1) 呼称は3度変化する | 3. 結論および考察 |
| 2) 家族内における呼称 | 1) 全体の構成 |
| 3) Ego および兄弟の結婚相手の呼称 | 2) 丁寧さについて |
| 4) 祖父を同じくする親族内での呼称 | 3) ompu について |
| 5) 同一氏族内での呼称 | 4) 人称代名詞について |
| 6) 女をうけとる側の姻族の呼称 | |

1. はじめに

1971年2月から3月にかけて、インドネシア共和国スマトラ島、北スマトラ州北タパヌリ郡のシドラン(Sidulang)村においてフィールド・ワークをおこなった際に聴取した資料を中心とし、1974年10月に再度同村を訪ね、若干の追加調査したものが本報告の基礎となる資料である。

バタック(Batak)族は、北スマトラの山中に住む水田稲作農耕民で、母方交叉イトコ婚をおこなう父系の親族組織をもつことで有名な民族である。バタック族は通常言語学的に6つの部族に分けられているが、文化的には北部のカロ(Karo)族、南部のトバ(Toba)族の2つに大きく分けられている。本報告は、この一

方の代表的な部族であるトバ族の呼称をあつかっている。

バタック族の村は一般に、ほとんど同一氏族(marga)の親族によって構成されており、少数の他の氏族の人々はこの中心となる氏族と姻戚の関係にあるのが普通である。トバ族の村であるシドラン村においても同様の状況にあり、Pangaribuan が中心となる氏族集団で村民の90%以上を占めており、Sibarani や Hutahayan などの他の氏族の人々は、Pangaribuan と姻戚の関係にあった。このように一般にバタック族の人々にとって、自分をとりまく人々は、ほとんど同一氏族あるいは姻族¹⁾であるといつてよく、トバ族における呼称を考えることは必然的に親族呼称を考えることになる。

* 国立民族学博物館第2研究部

- 1) トバ族の姻族には4種類ある。Egoの氏族から女をあたえる側の氏族を boru という。boruの boru, すなわち boru が女をあたえる側の氏族を Egoの氏族から boru ni boru という。また、女をあたえてくれる側の氏族を hula-hula といい、hula-hula に女をあたえてくれる側の氏族を rorobot という。トバ族の親族は、Egoの氏族(samarga/dongan sabutuha)と以上の4つの氏族とからなりたっている。

本報告は、親族名称と密接に関連しており、先に口答発表した「トバ・バタック族の親族名称について」²⁾につづくものである。これらの報告は、通文化的な比較研究あるいは一般論への展開をめざすものではなく、むしろトバ族に関する筆者なりのモノグラフの一部を構成するものとしてとりあつかおうとしている。すなわち、バタック族以外の人バタック族の村を訪ねた際に、ある人をなんと呼ぶことが適当であるか、あるいは、ある村人が他の人をなんと呼ぶことが適当であるかを容易に理解できるように記述することが主要な目的である。

呼称はさまざまな状況、すなわち時や場所、その時の心理的要因などによって変化するのが普通である。本報告では、このようなすべての呼称をとりあつかおうとしているのではない。規範となる呼称、すなわち、多数の成員がもっとも適当であると認めるような呼称を考察の対象としている。

2. トバ・バタック族の親族呼称

1) 呼称は3度変化する

トバ族の呼称を考える上で、第一に重要な要素は子供の誕生による呼称の変化である。トバ族のあいだでは、生れた子供の名前をつかって、「誰々のおとうさん」というよび方がある。このような呼称は *teknonymy* として有名なものであり、トバ族の呼称の固有な特徴となるものではないが、トバ族においても重要な要素である。

子供の誕生によって呼称が変化するとどまらず、孫の誕生によってさらに変

化する。これを表示すると表1のようになる。人ははじめ固有の名前でよばれる

表1 呼称は3度変化する

		子供の誕生 →	孫の誕生 →
male	個人名	ama ni X	ompu si Y
female		nai X	

X: 初子の名前 Y: 初孫の名前

る。結婚し子供ができると(子供の名前をXとすると)、「Xのおとうさん(ama ni X)」とよばれる。さらに孫ができると(初孫の名前をYとすると)「Yのおじいさん(ompu si Y)」とよばれる。このとき、初子や初孫の性別は関係なく、また初孫は多くの場合長子の子供であるが、次男次女の子供が初孫であるときも、その孫の名前が用いられる。曾孫が生まれたときは、さらに変化するであろうか? もはやそれ以上は変化しない。呼称は3度の変化で終る。

子供や孫の誕生によって呼称が変化することは、トバ族の人々が常に口にする『子供をふやし、水田をふやせ!』という基本的な生活の指針にそったものであり、「Yのおじいさん」というよび方は、一般に一種の尊敬の念がこめられていると考えられる。もちろん、自己の名前が他者に知られることを防ぎ、呪術をかけられることから防御するという側面もみのがせないが、ここでは先に述べた点がより重要であり、その故に子供のある人を個人名でよんだり、孫をすずにもっている人になお「Xのおとうさん」とよぶことは適切でなく、失礼であると考えられている。

2) 1976年5月、日本民族学会第15回研究大会発表。

2) 家族内における呼称

バタック族では、家族(dongan saripe)は父母とその子供からなる。3 世代にわたらないのが普通である。結婚後、ただちに独立した家屋に住むことが多く、経済的に独立できるまで、あるいは子供のできるまでの短期間、親と共住することもよくみられることである。また、まれに3 世代にわたって共住している場合もあるが、その場合でも生活の単位は親とは別になっており、カマドは別々にもうけられ、会計も別建になっている。

さて、家族が社会を構成する基本的な単位と一般に考えられているので、まず家族内での呼称からとりあげることにする。家族内の呼称は、親族名称とほぼ対応している。父は ama (名称: among),

母は ina (名称: inong), 同性の年長者は angkang³⁾ (名称と同じ)とよばれる。同性の年少者(名称: anggi)は個人名でよばれ、異性(名称: iboto)に対しては ito あるいは個人名が用いられる。

ところが、Ego の兄弟姉妹の呼称も結婚し子供ができると変化する。すなわち、年長者、年少者にかかわらず、男は ama ni X, 女は nai X になる。nai は ina ni のつまった形である。このとき, angkang か ama ni X (女性ならば nai X)のいずれがより適切なよび方であるのか? ama ni X の方がより適切である。ただし, angkang を用いても不適當ではない。一般的には、親族名称から導かれる呼称よりも子供があるかどうかの方が呼称としては強い要素である。

表 2 家族内の呼称

(Ego : male)				(Ego : female)			
		f	m			f	m
G ₊₁		ina	ama	G ₊₁		ina	ama
G ₀	+	ito or name	angkang	G ₀	+	angkang	ito or name
	-		name		-	name	

表 3 兄弟姉妹が子供をもったときの呼称

(Ego : male)					
		f		m	
G ₊₁		ina		ama	
G ₀	+	ito or name	nai X	angkang	ama ni X
	-			name	
child		-	+	-	+

3) 同性の年長者を名称および呼称において、現在では angkang とよぶ例が多い。これはインドネシア語の abang に対応するものである。しかし、バタック語には、同じ意味をもつ haha という言がある。兄弟(あるいは姉妹)を hahanggi とよんだり、兄弟の最年長者を sihahaan とよぶなど、haha がバタック族本来の固有の言葉と考えられる。また、名称上においては、haha はたびたび言及された。angkang は後に入ってきた言葉ではないかと疑っている。

3) Ego および兄弟の結婚相手の呼称
トバ族では同氏族 (samarga あるいは dongan sabutuha) を構成しているのは男のメンバーだけであり、女はふくまれないという。しかし、実際の場面では女はいずれかの氏族に組みこまれている。自分の姉妹は結婚するまでは (正確には子供ができるまでは)、同氏族のメンバーと考えられるが、嫁ぐとその氏族のメンバーに組みこまれる。同様に嫁として他の氏族の女性が自己の氏族内にとりこまれる。

さて、妻は名称上 pardibagas, pardijabu, tunggane boru などと称されるが、呼称としてはこれらの名称は用いられていない。もっとも一般的な呼称は inanta である。これは ina に人称の接尾辞-ta (hita の転じたもの、相手を含む私達の意) からなる語で、直訳すると「私達のおかあさん」となる。Ego の母は単に ina とよばれ、決して inanta とよばれず、妻と母は明瞭に区別される。もし Ego の母を「私のおかあさん」とよぶときは (三人称として)、ahu (一人称単数) の接尾辞-hu がもちいられ、「inaku」の形でよばれる。inanta とい

うよび方は、家族内に一人いる母を、すなわち妻を夫と子供にとっての「我々の母」という意味から導かれたものである。同様に夫は amanta とよばれる⁴⁾。

Ego が男の場合、兄の妻は angkang とよばれる。angkang は本来同性の年長者に対する名称および呼称として用いられるが、異性に対して用いられている点は特異な呼称の例である。しかし、これは名称上の angkang boru (女の兄さん) の略称として、angkang を用いているのである。Fischer は兄の妻に対する名称を angkang とみたが [FISCHER, 1966 : p. 255], 筆者はこれは略称としての呼称であると考えている。

弟の妻は boru M (M : marga の略号、氏族名某の娘あるいは女という意味) とよばれ、兄の妻とは明らかに異なった呼称が用いられている。また、子供ができた場合も、はっきりと異なったよび方がなされている。兄の妻は、inanta si X、弟の妻は nai X とよばれる。

姉妹の夫については 2-6) で述べる。

4) 祖父を同じくする親族内での呼称
祖父を同じくする親族は saompu とよ

表4 兄弟の妻の呼称

(Ego : male)

		f		m	
		+	angkang	inanta si X	angkang
G ₀	-		boru M	nai X	name
	child		-	+	-

4) amanta. Fischer は amanta を親族名称と考えているが [FISCHER, 1966 : p.262], これは正しくない。inanta と対句であるだけでなく、夫には他の名称がいくつもある。tunggane doli や, porahalang ulu, sinonduk がそれである。tunggane doli は丁寧な呼称であるというが [WARNECK, 1906 : p. 224], 筆者は tunggane boru 同様、名称であろうと考えている。

ばれ、家族の上位集団を形成している。この集団はいろいろの場面、特に結婚式や葬式において重要な機能をもつ集団であり、それ故、この集団内での呼称を検討してみる。

祖父・祖母は名称上では性の区別なしに ompung とよばれる。呼称上では ompu とよばれる。

+1 の世代、すなわち、父の兄弟およびその妻は家族内での呼称と同じであり、それぞれ ama, ina とよばれる。なお、saompu 内ではないが母の姉妹も ina とよばれる。同世代においても家族

内の呼称と同様である。ただし、angkang とよぶかあるいは名前によぶかは実際の年齢での上下ではなく、父の兄の子供は angkang, 父の弟の子供は名前によぶられる点は注意を要する。-1 世代より下は同世代の年少者の場合と同様である。

すなわち、saompu 内の呼称は家族内の呼称と基本的には全く同じである。

5) 同一氏族内での呼称

同一氏族(samarga, dongan sabutuha) での呼称は、saompu 内での呼称を少し変形したものである。すなわち、+2 世

表5 saompu 内での呼称

(Ego: male)

G ₊₂		f		m	
		ompu			
G ₊₁		ina		ama	
G ₀	+	angkang	inanta si X	angkang	ama ni X
	-				
G ₋₁		boru M	nai X	name	
G ₋₂					
child		-	+	-	+

表6 同氏族内での呼称

(Ego: male)

G ₊₂		f		m	
		ompu si X			
G ₊₁		inong nanggo si X		among nanggo si X	
G ₀	+	angkang	inanta si X	angkang	ama ni X
	-				
G ₋₁		boru M	nai X	name	
G ₋₂					
child		-	+	-	+

表7 boru の親族の呼称

(Ego: male)

G ₊₂	f		m
		ito ompu si X	boru M
G ₊₁	namboru or nai X		
G ₀	nai X		
G ₋₁			
G ₋₂			
Marga	same	other	

代の呼称は ompu si X, +1 世代は男は among nanggo si X, 女は inong nanggo si X とよばれる。省略して, 単に ompu, ama, ina などとよばれることもあるが, これらの呼称は saompu 内での呼称であり, この親族範囲をこえた同一氏族内では省略せずによぶことが適切であると考えられている。

同世代および下の世代に対しては sa-ompu 内での呼称と同じである。

6) 女をうけとる側の姻族の呼称

女をうけとる側の姻族を boru という。Ego が男の場合, boru を構成している男は世代にかかわらずなく, すべてその氏族名(M)でよばれる。親族名称で区別されている名称は一般に用いられない。この場合すでに子供や孫をもっていたとしても, 氏族名でよんでもよいということである。もちろん, ompu si X や ama ni X とよんでもさしつかえないが。

規範上, 母方交叉イトコ婚をおこなうとされているため, boru を構成している女性は自己の氏族から嫁いでいった女達となる。+2 世代の boru の女(すなわち, ZHFM)は祖父の姉妹(すなわち, FFZ)であり, 名称上 iboto と名付けられている女であるが, 呼称上は ito ompu

si X とよばれる。+1 世代の女は, 名称と同じ namboru が用いられる。あるいは nai X とよばれる。とくに多くの namboru が同席しているときは nai X とよぶのが普通である。

boru の Ego と同世代の女はすなわち Ego の姉妹であり, 結婚前は ito あるいは名前でもよんでいた女達である。子供ができることと nai X とよばれるのは家族内の呼称でみた通りである。-1 世代, -2 世代は, 同世代と同様に nai X が用いられる。

バタック族の婚姻規則の中に, 親を同じくする兄弟姉妹は, 同性の兄弟姉妹の配偶者の兄弟姉妹とは結婚できないという規則がある。たとえば, 弟は兄の妻の妹とは結婚できない。この規則のため, boru を構成している女には, 他の氏族から嫁いできた女がかならずいる。また, 母方交叉イトコ婚は規範上のことであって, 実際にはその例はきわめて少なく [BRUNER, 1959: p.120], 他の氏族からの女が多数 boru の中にふくまれている。これらの他の氏族からの女は, 世代にかかわらずなく, 彼女達の氏族名を用いて boru M とよばれる。

なお, boru ni boru, すなわち boru の

表 8 hula-hula の親族の呼称

(Ego: male)

	f		m	
G ₊₂	ompu si X			
G ₊₁	namtulang or namtulang nanggo si X		tulang or tulang nanggo si X	
G ₀	namorai		tunggane	
G ₋₁	boru M	nanggo si X	parumaen or name	nanggo si X
G ₋₂		?	name	?
child	-	+	-	+

boru に属す親族は、男は氏族名で、女は自己の氏族名が用いられて boru M とよばれる。

7) 女をあたえてくれる側の姻族の呼称

妻あるいは母、息子の妻の親族を hula-hula という。hula-hula の +2 世代の男女は同氏族内の呼称と同様に ompu si X とよばれる。+1 世代の男に対しては tulang nanggo si X あるいは単に tulang とよび、その妻は namtulang nanggo si X あるいは namtulang とよばれる。同世代の男に対しては、すなわち妻の兄弟に対しては tunggane とよび、その妻を namorai とよぶ。namorai は na-mora-i であり、mora は金持の、na-mora でお金持の婦人、i は “さっきいった、あの” という意味の接尾辞 [Tuuk, 1971:p.221] であり、もともとの意味は “あのお金持の婦人” という意味である。これは tunggane ともども非常に丁寧な言葉とされている。なお、namtulang は、inong namorai と呼ばれることがあり、不適當な呼称とは考えられていない。

-1 世代の男、すなわち息子の妻の兄

弟 (SWB) あるいは妻の兄弟の息子 (WBS) は名称上と同じ parumaen、あるいは単に maen とよばれる。その妻は出自の氏族名を用いて boru M とよばれる。そして、もしすでに子供のあるときは nanggo si X とよばれる。-2 世代の男は個人名で、その妻は boru M とよばれるが、すでに子供をもっているときの呼称は聞きもらしている。

hula-hula に対しては、親族名称以外の呼称がある。Raja nami (raja+nami: 我々の王) とよびかけることがある。これはきわめて丁寧ないい方である。この呼称は、hula-hula のどの男に対しても使用できるものである。

8) 親族でないトバ族の人々をよぶときの呼称

親族でない人々に対しては、男は氏族名 (M) で女は boru M とよばれる。しかし、もし氏族名が知られていないときは、Ego が男の場合、みかけ上自分より年長者であるときは ompu と、年少者であるときは lae とよぶ。lae は親族名称上では、姉妹の夫および妻の兄弟をさす言葉である。女に対しては、年長者に

表9 親族でないバタック族の人々の呼称

(Ego : male)

G+	f		m	
	boru M	ina or inong	M	ompu
G-				ito
name of Marga	known	unknown	known	unknown

は ina あるいは inong と、年少者には ito とよびかける。これらのどの語も、比較的ニュートラルな言葉であることを注意しておいていいであろう。

ただし、氏族名が不明の場合ということは、トバ族の人々にはほとんど考えられないことであるらしい。氏族名が不明の人はまったくの他人であるに等しい。もし、知らないときは誰かが教えてくれるし、あるいは本人が名乗りをあげる。そのため、不明の場合というのは実際にはほとんどありえない、と考えてよい。

3. 結論および考察

1) 全体の構成

以上の結果をまとめたのが表10である。Mo は自己の氏族 (samarga), M-1 は女をあたえてくれる氏族 (hula-hula), M+1 は女をあたえる氏族 (boru) を示している。marga の+は氏族名が既知であること、-は未知であることを示し、child の+は子供がすでにいること、-はまだいないことをそれぞれ示している。またこの表は Needham が母方交

又イトコ婚の分析に用いた表をアレンジしたものであり [NEEDHAM, 1962: p.76], Needham の表と同様に類別的に呼称を示していることに注目していただきたい。そして、この表によって、当初の目的が一応達されたと思う。すなわち、ある人が他の人をどのように呼ぶことが適当であるかは、この表からただちに読みとれる。

また、この表からトバ・バタック族の親族呼称は、どの氏族に属するのか、性別、世代、そして、同世代より下ならば子供の有無、同氏族なら saompu 内かどうかかわかれば、適当な呼称が決定することを示している。これらが、かれらの呼称を決定する要素なのである。

2) 丁重さについて

“Xのおとうさん”という呼称に3タイプがあった。among nanggo si X, amanta si X, ama ni X (女性ならば inong nanggo si X, inanta si X, nai X) の3タイプであり、これらは互いにおきかえることはできない⁵⁾。この3タイプは丁重

5) それぞれを意識すると次のようである。

among nanggo si X ; Xさんのおとうさま
(nanggo は上の意, 直訳すると, Xさんの上にあたるちち)
amanta si X ; Xさんのおとうさん
(直訳すると, x さんの我々のちち)
ama ni X ; Xのとうさん
inong nanggo si X, inanta si X, nai X も同様である。

表10 トバ・バタック族の親族の呼称

		hula-hula				samarga		boru		Mn	
		M ₋₁		M ₀		M ₀		M ₊₁		Mn	
		f		m		f		m		m	
G ₊₂		ompu si X						ito ompu si X			
		(ompu)									
G ₊₁	ina or inong	namtulāng or namtulāng nanggo si X		tulāng or tulāng nanggo si X		inong nanggo si X (ina)		among nanggo si X (ama)		namboru or nai X	
G ₀	+	boru M		namorai		tunggane		anggang inanta si X		name or ito	
G ₋₁	ito	boru M		nanggo si X parumaen nanggo si X		boru M boru M		name ama ni X		name nai X	
G ₋₂		boru M		?		name		?		name	
Marga		-	+	-	+	-	+	-	+	-	+
Child											
Marga								M		M	
										lae	
										ompu	

さにおいてランク付けがあり、among nanggo si X, amanta si X, ama ni X の順に丁重さの度合が減少する。

同様のことが、nanggo si X と ama ni X あるいは nai X との間にもみられ、相互におきかえはできず、nanggo si X が丁重な呼称である。

ompu si X は 2-1) で述べたように、この呼称自体にある種の尊敬の念がこめられており、また tunggane や namorai はきわめて丁重な呼称であった。

ところで、丁重さについて検討を要す

る2つのケースがある。1つは、同氏族内の同世代の年長者、anggang とよばれるケースである。anggang は明確に年上であることを示しており、ある種の丁重さを含んでいると考えられるが、子供をもつと ama ni X (女性ならば nai X) とよばれ、この呼称は丁重な呼称ではない。この2つの相反する呼称をどう考えればよいであろうか。

丁重な呼称というものは、2つの成分からなりたっている。本当に尊敬の念を表現する場合とよそよそしさを表現する

場合である。同様に、丁重でない呼称も尊敬しなくてよい、あるいはなんらかの意味で下とみる場合と、親しさを表現する場合に用いられると考えられる。

丁重な場合は、“Xのおとうさん”という表現を用いずに、氏族名でよぶことによってよそよそしい呼称と尊敬の呼称とは区別されている。しかし、丁重でない場合は呼称の形としては区別されておらず、ともに *ama ni X* あるいは *nai X* とよばれるため、他の条件から2つの場合を区別しなければならない。*angkang* を *ama ni X* あるいは *nai X* とよぶときは、時に *angkang* とよばれる故に下を示す呼称ではなく親しさを表現する呼称と考えられる。*boru* のメンバーに *ama ni X* や *nai X* を用いる場合は、席のとり方 [吉田, 1973: pp.216-217] などから下にみる場合の呼称と考えられ、同一氏族内の下の世代に対してのこれらの呼称は、下にみる要素と親しさの要素の合成と考えられる。

他の1つのケースは、*hula-hula* の-1世代の女に対してである。彼女は子供のまだないときは *boru M* とよばれる。子供が生れると *nanngo si X* とよばれるようになる。*boru M* は丁重な呼称ではない。親族でない女達に用いる呼称であり、むしろよそよそしい呼称である。そして、*nanngo si X* は丁重さをともなった呼称である。これは彼女が子供を生むことにより、*hula-hula* のメンバーと認知されることと関係があるのであろう。結婚はすなわち子供をつくることなのである。

さて、これらを考え合せると、表10に斜線をほどこした部分が、丁重につきあわなければならない範囲を示している。

ただし、同族では、親しみが常に同居しており、とくに *samarga* 内では著しいと考えられる。その範囲は *hula-hula* と同族の年長者、そして *boru* の中の祖父の姉妹であり、*boru* の側はほとんど特別の丁重さを必要とせず、ほとんど他人のような呼称で対応されている。ただし、*boru* の側からは、とくに丁重にふるまわなければならず、これらのことは、すでに指摘されている *hula-hula* の優位あるいは尊敬と、*boru* の劣位を示している。

丁重さを必要とする範囲が *hula-hula* の *hula-hula*、すなわち *rorobot* にまでおよぶかどうかは明らかでない。調査当時、*rorobot* の存在にまだ気がついていなかったためである。

3) *ompu* について

トバ族の人々は3度呼称が変化すると述べた。孫をもつと *ompu si X* とよばれるようになる。しかも、この呼称は一般に親族の関係によって生じる呼称よりも強力に働く規則である。トバ族の人なら誰でも *ompu si X* と呼ばれたいと望んでいる。*ompu* になることによって、名実ともに一人前になると考えられている。

葬儀において、子供をもたずに死んだ人は密葬される。なんの葬儀もおこなわれない。孫をもたない人が死んだときは、家族内でささやかな葬儀がおこなわれるにすぎない。孫をもったとき以後から、はじめて葬儀らしい葬儀がおこなわれるようになる。それは棺の頭の部分におかれるカゴに象徴される。孫がいた人においてはじめて、日常つかわれている米カゴ (*appang*) がもみをみたしておか

表11 バタック族の人称代名詞

		丁 重	非 丁 重		接 尾 辞	接 頭 辞
一人称	単	ahu			hu	da
	複	hita, hami			ta nami	
二人称		hamu (hamuna)	ho		mu muna	—
三人称		nasida	ibana		na	—

Tuuk [Tuuk, 1971 : pp.215—219, 229—253] から作製。

れる。曾孫がいた人は、中位の大きさの同型のカゴ (papalian) がかさねられ、玄孫をもった人の場合には小型のカゴ (topongan) がさらにつみかさねられる。人は ompu になってやっと一人前に死ぬことができ、さらに子孫がふえたとき、その葬儀の格は上昇してゆく。

一方, saompu 内の呼称は家族内の呼称とほとんど同じであった。このことは saompu の範囲まで、一樣に同じ呼称が分布していることを示し, saompu の範囲を越えると呼称にも変化がみられた。

トバ族の親族を検討する際には, ompu は重要なキーワードであると考えられる。

4) 人称代名詞について

トバ族の親族呼称をあつかってきたが、まだあつかっていない重要な呼称がある。それは人称代名詞の二人称である。

人称代名詞については Tuuk [Tuuk, 1971 : pp. 215-219, 239-253] にきわめて詳しく、筆者自身 Tuuk から学んだことが多い。それ故、なにも新しいことをつけたすことはないが、丁重さについて少しまとめておく。

バタック語の人称代名詞を表11にまとめておいた。接尾辞、接頭辞は一般に丁

重ない方ではない。ここでとりあげなければならないのは二人称の hamu と ho である。Tuuk によれば, hamu は他の氏族の人々に対して用いられ, ho は hamu を用いなくてもよい人々に用いるという。さらに、自分の姉妹は他の氏族に嫁ぐ故に、成人した兄弟と姉妹の間では hamu が用いられ、同様の理由により成人した娘に対しても hamu が用いられるという。先の筆者の表を用いれば, Mo 以外の人に対しては hamu を用いることになる。そして-1 世代までおよぶことになる。

この hamu の用法は 3-2) で検討した筆者の結論とは異なる。hamu の用法は丁重さの裏側にあるよそよそしさの表現なのであろうか。

なお、これは蛇足であるが、老人が若い男を damang (直訳すれば、私の父)、若い女を dainang、孫や奴隷を daoppung とよぶと Tuuk は述べている。自分の息子、あるいは息子の世代に属する男を“私の父”とよびかけ、孫に対して“私のおじいさん”とよびかけるのは筆者には奇妙に思える。このよびかけがどうして可能なのであろうか。筆者にとって今後究明すべきテーマの1つである。ただ、among の among は ompung であり、

ompung の among は among であるという親族名称の中でのくりかえしが観察された。このことを逆にみると、ompung の息子は among であり、among の息子は ompung であるはずであり、このことと関連があるのではないかと考えている。hamu の用法とともに、今後検討してみたい問題である。

謝 辞

本調査に御協力下さいましたシドラン村の方々、メダンでの準備にお世話下さいました S. Sagala 氏、ジャカルタでいろいろの御便宜をお計り下さいました元在ジャカルタ日本大使館館員伊東猛氏に深謝いたします。また Warneck のトバ・バタック語の辞書のコピーをお送り下さいました東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の土田滋氏に深謝いたします。

文 献

- BRUNER, Edward M., 1959, "Kinship Organization among the Urban Batak of Sumatra", *Transaction of the New York Academy of Sciences*, Vol. 22, New York.
- FISCHER, H. Th., 1966, "Toba Batak Kinship Terms", *Oceania*, Vol. 36-4, Sydney.
- NEEDHAM, Rodney, 1962, *Structure and Sentiment*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- TUUK, H.N. van der, 1971, *A Grammar of Toba Batak*, (Translated by Jeune Scott-Kemball from the Dutch *Tobasch Spraakkunst*, Eerste Stuk, 1864, Tweede Stuk, 1867, Amsterdam.), Martinus Nijhoff, Hague.
- WARNECK, J., 1906, *Tobabataksch-Deutsches Wörterbuch.*, Landsdrukkrij, Batavia.
- 吉田集而, 1973, 「スマトラ・トバ・バタック族の住居空間の分割」, 『住いの原型Ⅱ』, 鹿島出版会。